

令和元年6月14日現在

機関番号：32511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02977

研究課題名(和文)日本の小学校英語の教科化への対応に関する研究 - 韓国の小学校英語教育を通して -

研究課題名(英文) A study on English Language Education at Elementary School in Response to the Introduction of English as a Subject in Japan - From a Perspective of Korean English Language Education -

研究代表者

伊藤 静香 (ITO, Shizuka)

帝京平成大学・現代ライフ学部・准教授

研究者番号：10761265

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：韓国の小学校英語教育の実践研究から、授業に組み込まれる4技能に関する活動の積極的な導入方法と、小学校段階の英語指導法としての専門性を向上させる教員研修に関する政策の位置づけが明らかになった。それらの結果は、教科化を見据えた日本の小学校英語教育における課題の対応策として、4技能に関連した児童中心の活動を重点的に導入する教育方法へのシフトの検討及び指導を行う教員について、実践的な視点から英語教育の専門性を育成することを基盤とする教員研修制度を構築する必要性を明示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

教科化を見据えた日本の小学校英語教育について、韓国の実証的な研究を通して検討された研究成果は、今後、日本の小学校英語教育の在り方を多角的に捉える過程に寄与し、日本の小学校英語教育を教科として実施するにあたり、実践的な側面から有効に活用されることが可能である。また、小学校英語教育研究における1つの枠組みの提案として、日本と韓国両国の英語教育研究に貢献し得る。

研究成果の概要(英文)：This study shows that Korean elementary English language education has organised daily English classes with student-centred activities relating to four skills and that Korean teacher training system for English teaching has worked effectively. This result shows us that the needs for taking measures for the issues of English language education at elementary level in Japan in terms of the shift for introduction of student-centred activities relating to four skills and also the needs for organisation of teacher training system for English teaching at elementary level.

研究分野：英語教育

キーワード：小学校英語教育 韓国の英語教育 英語指導法 4技能と活動 実践研究 授業分析 英語教員研修

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

## 1. 研究開始当初の背景

日本の小学校英語教育の研究は、これまで、日本の教育課程に準じた外国語活動の指導内容及び方法を中心に検討し、教育実践を行う現場の教員に提示してきた。また、世界各国、とりわけ東アジア諸国の英語教育比較研究においても、小学校段階の英語教育に関する政策研究をはじめとして、隣国の中国、韓国と並び日本の現状が明らかにされている。

本研究課題と関連する日本の小学校英語教育については、3つの観点からの検討が行われてきた。第1に、小学校英語教育の目的についてである。日本の小学校英語教育の目的は国際理解を原点として変遷してきたが、現行の外国語活動では、異文化理解を目指すと同時に、言語に関する活動に焦点が当てられている(伊藤、2011)。第2に、学習内容及び指導法についてである。外国語活動の授業では音声を中心とする活動、つまり「聞く」「話す」の2技能に重点を置いて指導が行われている。2020年からの教科化の導入に際し、「読む」「書く」が加わる4技能指導となる場合に、指導法の見直しとその対応が求められることになる。韓国、中国の小学校英語教科書の分析からは、両国は4技能(聞く、話す、読む、書く)に関する活動を小学校段階で積極的に取り入れていることが明らかになっている(伊藤、2012)。第3に、英語を教える教員についてである。小学校英語教育導入に関する教員アンケート調査(伊藤、2015)では、日本の小学校教員は、グローバル時代において英語の重要性は認識しているものの、英語教育の専門性という視点から、実際に自ら授業実践を行うことには消極的な傾向にあり、指導する教師を巡って課題が提起されている。

隣国の韓国では、1997年より教科として第3学年より小学校に英語を導入して以来、4技能の指導を取り入れて、積極的に小学校英語教育を推進していることが明らかになっている。一方で、英語教育を促進する動向において課題も生じている。日本が2020年より、教育課程上、韓国と同様に小学校第3学年より英語教育を導入し、高学年では教科として4技能の指導を展開する段階にあることから、韓国の検証を通じて日本の課題がより明確となり、韓国の実践研究から示唆を得ることが可能である。このような背景から、日本の小学校英語教育研究においては、小学校段階の英語教育が先行している国、すなわち本研究の対象国である韓国の調査研究を通じて、これまでの先行研究を踏まえた新たな研究の観点を加えた検討から、改革に伴う課題の抽出と、その課題への対応策を見出すことが求められる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、日本の小学校英語教育が教科化を導入するにあたり取り組むべき課題について、韓国における小学校英語教育の研究を通じて日本が今後小学校英語教育を有効に実施していくための対応策を検討し、提示することである。

具体的には、韓国の小学校英語教育について文献研究及び実地調査を実施し、実践的な側面から検討を行う。分析の枠組みとして、小学校英語教育カリキュラムと目的、指導内容・方法、授業実践を行う教師、以上3つの観点から韓国の小学校英語教育を捉え、現状と課題を明らかにすることを試みる。韓国の小学校英語教育実践研究と、教科化を見据えた日本の小学校英語教育研究において抽出された課題について実証的に検討を行うことを目的とする。

## 3. 研究の方法

(1)韓国における小学校英語教育に関する文献研究及び事例研究：文献・資料による研究により、韓国の小学校英語教育の現状と課題を把握し、明らかにする。実践研究として授業観察及び授業分析を行い、4技能(聞く、話す、読む、書く)の導入方法に着目した分析の観点から、韓国の小学校における英語指導法の特質を明らかにする。韓国教育部の英語教育の専門家を始め、小学校英語教育の研究者及び英語の専科教員への面接調査により、韓国の小学校英語教育が直面しているとされる課題について検討する。

(2)日本の小学校英語教育に関する文献研究及び事例研究：文献・資料による研究と合わせて授業観察を行い、4技能(聞く、話す、読む、書く)の観点からみた日本の小学校英語教育の現状について把握し、明らかにする。教員への質問紙及びインタビュー調査により、小学校英語教育の教科化を見据えた教員の意識と課題を検証する。

(3)以上の調査研究から得られる結果を通じて、韓国における小学校英語教育の検討から示唆される日本の小学校英語教育が直面し得る課題の抽出とその対応策について、本研究の枠組みに沿って検討を加える。

## 4. 研究成果

(1)文献、資料の収集と分析に加え、韓国教育部の訪問、英語教育研究者の訪問により、韓国の小学校英語教育の制度、カリキュラム、教育方法等に関する近年の動向と現状について明らかにされたことで、韓国における小学校英語教育実践を捉える枠組みができた。すなわち、韓国では、特に英語という教科の専門性から、大学の教員養成課程での教育と、

教師になった後の教員研修における教育の位置づけが明確化され、英語科の教員養成に関する制度が整備されていることが小学校英語教育の促進に功を奏しているといえる。

(2)韓国の小学校四校の訪問と授業観察を行い、授業の構成、指導方法について4技能の導入という観点から授業分析を実施し、検討をした。その結果からは、児童にとって身近なトピックを扱い、日常生活で児童が実際に経験している事柄や容易に想定できる身近な場面について、児童が自らの考えを発表するアウトプットに関する活動が重点的に導入されているという共通した特質が捉えられた。また、韓国の英語教員研修における公的専門機関を訪問し、実施されている小学校教師に対する英語の現職教育プログラムについて、観察した授業と合わせて授業研究と指導法の分析を行った。研究成果は論文「韓国の小学校における英語教育実践の一考察 - 活動と4技能を中心に - 」として発表した。

(3)日本の小学校英語教育に対する文献、資料の収集と分析に加え、教員の意識調査として質問紙による調査と分析を行った。その結果、日本の教師は特に教科としての教授法の専門性に関する懸念を持つ教師が多く、また、外国人教師とのチーム・ティーチングの在り方、指導方法と役割、担任が教科として英語の授業を行う際の英語教育に関する専門性の欠如といった観点を反映した課題が抽出された。

(4) (3)の調査結果を受け、韓国の小学校訪問において外国人教師と韓国人教師とのチーム・ティーチングによる授業中の発話分析を行い、また実践者である教師にインタビュー調査を実施した。その結果、外国人教師と韓国人教師との入念な授業打ち合わせのもとに展開する授業において、扱うトピックの選択、外国人教師、韓国人教師、児童による発話とやりとり、すなわち授業中に発生するコミュニケーションについて、教師と児童間の対話、児童間の対話、外国人教師と韓国人教師間の対話が成立しており、複数方向によるコミュニケーションが活発に行われる傾向がみられた。この研究調査の結果からは、外国人教師との授業の在り方について、日本の小学校英語教育が目指す児童のコミュニケーション能力の育成という観点からも検討をすべき喫緊の課題として認識された。

(5)韓国の小学校英語教育の研究者との面接調査及び授業の実践者である教師の面接調査からは、大学における教員養成課程での英語教育に関する専門性を育成するカリキュラムの重要性と、韓国における外国語人教師を巡る政策の変化を受けて、韓国においても外国人教師とのチーム・ティーチング (Co-teaching) の指導方法について取り組むべき課題があることが指摘された。総じて、韓国の小学校英語教育実践研究から示唆された日本の教科化を見据えた小学校英語教育を有効に実施するための検討課題と講じ得る対策として、4技能に関する児童中心が行う活動とコミュニケーション活動を促す発話を授業で重点的に導入する教育方法へのシフトと、日本の学習指導要領に準じた児童英語教授法の専門性の向上を図るための建設的な教員研修制度構築の必要性を提示した。これらの研究の成果は「教科化を踏まえた日本の小学校英語教育の現状と課題-韓国の実践を通して- 」と題し学会で発表を行った。

(6)本研究課題の総括として、研究代表者が韓国の授業実践から捉える日本の小学校英語教育の教科化を見据えた現状と課題に関する考察をまとめ、また、研究協力者が韓国の近年の小学校英語教育政策から検証される課題についてまとめた論文をそれぞれ著述した。さらに、韓国の研究協力者による、韓国の小学校英語教育に関する政策におけるナショナル・カリキュラムの変容に着目した分析及び小学校レベルの英語教育実践に関する最新の韓国の動向として Extensive reading の役割に関する研究論文二編の寄稿を受けて、研究成果報告書冊子の編纂を行い、発行した。

## 5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

伊藤 静香「韓国の小学校における英語教育実践の一考察 - 活動と4技能を中心に - 」『帝京平成大学児童学科研究論集』、査読無、第8号、2018、pp.35 - 44

〔学会発表〕(計 1 件)

伊藤 静香「教科化を踏まえた日本の小学校英語教育の現状と課題-韓国の実践を通して- 」日本個性化教育学会、2018

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：

発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年：  
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕（計 2 件）

1.伊藤 静香「教科化を踏まえた日本の小学校英語教育の現状と課題 - 韓国におけるティーム・ティーチングの実践を通して - 」平成 28-30 年度科学研究費助成事業研究成果報告書冊子、2019、pp.5 - 20

2.加藤 幸次「韓国における小学校英語教育政策をめぐる近年の『バックラッシュ』動向についての検討 - 『小学校低学年の英語教育禁止策』および『NET 削減策』に焦点をあてて - 」平成 28-30 年度科学研究費助成事業研究成果報告書冊子、2019、pp.55 - 70

## 6 . 研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8 桁）：

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：加藤 幸次

ローマ字氏名： KATO, Yukitsugu

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。